

## 第2章 近代的ホテルの誕生と発展

馬車の時代には旅人の絶対量が少なく、国際観光都市に数件あった高級ホテルや、市の中心部にあった駅馬車や郵便馬車のための駅宿を除き、専門の宿泊業は採算が取れず、居酒屋その他地元住民への飲食サービスを兼ねた施設が宿泊客も受け入れるという形で成り立っていた。鉄道の誕生によって人々の移動が活発化すると、小規模のインでは対応できず、需要増に対応して収容力の大きい宿泊専門の高層ホテルが誕生するようになる。以下、触れることのできた資料から近代ホテル発展の歴史を概観する。

### 1. ヨーロッパの近代ホテル

鉄道の駅は既存市街地の周縁に作られ、駅周辺を新開発しながら発展する。近代的なホテルはまず駅舎の中、あるいは余裕ある隣接地に収容力の大きいいわゆるステーション・ホテルないしターミナル・ホテルが建設される。既存市街地内では、しばらくの間大きなホテル用地を提供する者が少なかったが、一方で、大都市では駅と市内のビジネス中心地が離れていて、市内交通が不便な時代（馬車しかない）だったから、次第にかつての貴族の住宅がホテルに転用されたり、都市改造計画によって中心部の一等地に豪華なホテルが建設されるようになる。

旅行の新時代は、ホテルの在り様にはっきり表れてくる。とくに、かつてのように上層階級が相互に私的に泊めあう時代でなくなると、王侯貴族にふさわしい施設とサービスを提供する豪華ホテルも誕生する。もちろん、商用旅行者や中産階級のためのリーズナブルな小ホテルも数多く建てられて需要に対応していく。

### ステーション・ホテルの登場

ターミナル駅舎にホテルを併設した最初の例は、ロンドン・バーミンガム鉄道がロンドンに乗り入れた際、ユーストン駅に併設したのが最初である。ユーストン駅は1837年、何もない野原に二本の線路だけの駅としてスタートした。翌1838年にドーリア式立柱を配したギリシャ神殿のような駅舎を建て、駅舎内のホテルは翌1839年に開業した。これ以降ロンドンに乗り入れる主要鉄道は、いずれもユーストンにならってターミナルに近代的なホテルを併設する。1852年のキングスクロス駅、1854年のパディントン駅、1860年のヴィクトリア駅、1868年のセントパンクロス駅などである。小池滋「英国鉄道物語」の第2章は、ロンドンのターミナル駅を、最初にできたユーストンから時計回りに13駅を順次紹介し、ターミナルにまつわる数々の逸話を紹介していて面白い。併設のホテルもいくつかは取り上げられている。改修や建て替えなどを経て、今日でも同じ場所で営業しているステーション・ホテルとしては、パディントン駅のグレート・ウエスタン・ロイヤル・ホテル（現在はヒルトン・パディントン・ホテル）、ゴシック様式の駅舎で知られるセントパンクロス・ホテル、ヴィクトリア駅のグローヴナー・ホテル、リヴァプール・ストリート駅のグレート・イースタン・ホテルなどがある。

**地方のステーション・ホテル** 地方では、1841年に開通したヨーク駅のステーション・ホテルを筆頭に、ダービー駅のマドランドホテルや、ホーリーヘッド、バーミンガム、リヴァプール、プレストン、それにスコットランドのパーサやグラスゴーなどの駅に、鉄道開通と同時にステーション・ホテルが開業した。今日でも高級ホテルとして名高いのが鉄道王ハドソンの出身地ヨークのステーション・ホテルである。ハドソンは、ロンドンと北東部の工業都市ニューカスルをつなぐ鉄道を計画中だったジョージ・スティーブソンと偶然出会い、彼の計画がヨークをバイパスして最短コースを直行する計画になっていることを知って、是非にとヨーク経由に換えさせた。ハドソン自身は鉄道界から不名誉な退場をしたが、その後のヨークの繁栄は鉄道誘致の成功にあるとして、後のちまでハドソンの功績として称えられることになる。ヨークでも、1841年に鉄道が開通すると同時にステーション・ホテルが建てられ、民間の事業者が経営していたが（スカウインズ・ホテル）、これとは別に1852年、鉄道会社が駅の敷地に新ステーション・ホテルを建てている。ヴィクトリア女王がスコットランドの居城バルモラル城への往来にこのホテルを利用されたことから、ロイヤル・ヨーク・ホテルと名前を換えた。また、最初のヨーク駅は鉄道交通が活発化するにつれて手狭になり、1877年に城壁の外に巨大な新駅を建設した際、ロイヤル・ヨーク・ホテルも増築され、現在も威容を誇っている。新ヨーク駅はイギリス最大の駅舎として今日に至っている。

**急増するホテル** 先述のブラッドショー時刻表の研究書「鉄道時刻表事始め」（小松芳喬著）によると、ブラッドショー時刻表への広告掲載が始まるのは1843年版からである。1840年代はまだホテルの数も少なく、したがってホテル広告はわずかだったが、鉄道の拡大が旅行者向けの宿泊施設の質の改善に大なる役割を果たしたことは、広告の増加にはっきり現れている。1850年6月号では広告全58.5ページのうちホテルその他の宿泊施設が20ページを占めたが、1876年7月号ではホテルの広告は巻末に集められて94ページにも及び、地域別の索引も付けられていた。ただし、1860年代までロンドンおよびイギリスのホテルは、ヨーロッパ大陸や北米のホテルに比べて劣っていると述べられている。宿泊施設は外国人の来訪が多いと質的に高いものができるのが通例であり、イギリス人は大いに外国に旅行したが、自国の国際観光目的地としての発展には関心が薄かったのである。

### 近代的豪華ホテル

都市中心部の近代的豪華ホテルの嚆矢となったのはやはり国際都市パリのそれであった。産業革命期を通じてフランスの人口は増加を続け、とくに都市への集中が顕著であった。パリは増加する人口を収容するために都市改造が急がれたが、1850年代まではアンシャン・レジーム時代の街路を部分的に手直ししただけで、根本的改造は行われなかった。それを今日のパリの姿へと大きく変えたのが、第二帝政期にナポレオン3世によってセーヌ県知事に任命されたジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン男爵（1809~91）であることはよく知られている。

**オスマンのパリ大改造とグランドホテル** ナポレオン一世の甥ルイ・ナポレオン（1808～73）は、ナポレオン一世失脚後長らく亡命生活を送っており、1846～48年にはロンドンに住んでいた。ロンドン市は1666年の大火で密集した木造家屋の80%以上を焼失したあと、木造家屋の建設を禁じ（石とレンガ造りのみ）、都市計画によって広い街路に作り直されていた。ルイ・ナポレオンは新しい市街に感銘を受け、パリをロンドンに勝る美しくて衛生的な都市に改造したいと望んでいた。2月革命（1848）で第二王政が倒れると、彼は帰国して大統領に立候補して圧勝した。すぐに都市改造に着手しようとしたが、大統領の権限が弱く思うに任せなかった。1851年12月、クーデタによって議회를解散し、憲法を改正して独裁的大統領となり、翌1852年12月には国民投票によって皇帝ナポレオン三世（在位1852～70）となって絶対的な権力を獲得した。その間、1851年5月1日から10月15日までロンドンで開催された初の万国博覧会に大きな刺激を受け、ロンドン万国博が終了して半年後の1852年3月には、早くも1855年にパリで万国博覧会を開催することを決定した。ロンドン万国博の会場だった水晶宮（クリスタル・パレス）にならって、シャンゼリゼ界隈に万国博会場を新設する一方、1853年3月にオスマンをセーナ県知事に任命し、並行してパリ市の大改造に踏み切ったのであった。

ナポレオン三世がパリ万博に間に合うように建設させた重要施設のひとつが超豪華なグランドホテル・デュ・ルーブルであった。このホテル・デュ・ルーブルを筆頭に、オスマンによる市街地改造事業の推進と1867年の二回目のパリ万国博開催を経て、次々に巨大な豪華ホテルが建設された。それゆえ、19世紀後半から20世前半にかけてのホテル産業は「グランドホテルの時代」と呼ばれることになる。

**グランドホテル・デュ・ルーブル誕生** グランドホテル・デュ・ルーブルは、1855年の第1回パリ万国博に来訪する貴顕紳士を迎える目的をもって建設された。それ以前には例のない快適かつ近代設備を備えた700室の巨大ホテルであった。1250人もスタッフが日夜働き、世界初のような様々なサービスを生み出した。鉄道駅との間に乗合馬車をシャトル往復させ、ロビーには幅の広い階段とエレベーターを配し、郵便局と電信室（電信の発明は1844年）、外貨交換所や旅行案内所を設け、ガイドと通訳を常駐させていた。レストランで自慢のフランス料理と並行して、外国の著名料理を供したのもこのホテルが最初であった。

グランドホテル・デュ・ルーブルの一階は、建物完成と同時にこの頃誕生した《百貨店》に貸し出され、「百貨店ルーブル」は時流に乗って大繁盛し、1865年には売上件数が1500万件にも上り、間もなく4500万件に達したという。そこで1875年にはグランドホテル・デュ・ルーブルの建物を買って、ホテルを現在の位置に縮小・移転させ、広い敷地に広大なルーブル百貨店を建設した。ホテルとデパートを所有したルーブル商会 *Société du Louvre* は、1898年に二番目のホテルとしてコンコルド・サンラザールを建設し、1909年には、貴族の館を改造してコンコルド広場にホテル・クリヨンを開業した。なお、ルーブル百貨店とホテル・デュ・ルーブルは、第二次大戦中、英軍の空爆を受けて大きく被災し、戦後復活はしたものの、昔日の輝きは取り戻せなかった。

**グランドホテルの時代** グランドホテル・デュ・ルーブルの建設以後、各地で豪華なホテルの建設が続く。グランドホテルとは、それまでのホテルと違い、召使いがかしづく貴族階級の生活を商業化したものといわれる。宿泊客のグレードに合わせて使用できるよう、様々なタイプの客室が用意され、室内装飾にもふんだんに金がかけられた。宿泊施設であると同時に、豪華な食事を提供し、富裕階層の社交の場として利用された。

パリでは、オスマンの指導で狭くて不衛生な中世以来の通りを一掃したあとに、1862年にシャルル・ガルニエ設計によるオペラ座の建設が始まり、同じ年、その向かって左側に一足早くグランドホテルの名を冠するもう一つのホテルが開業した。二度目のパリ万国博覧会（1867年）のために建設されたグランドホテル・ド・ラペである。一階がカフェ・レストランとして有名なカフェ・ド・ラペで、開業時にはウジェニー皇后が臨席し、オッフエンバック指揮による「椿姫」の演奏で式典が華やかに行われた。ちなみに、13年後の1874年にガルニエ設計のオペラ座が完成し、オペラ座からルーブル宮に向かうオペラ大通りと一体となって、一段と華やかな街区となった。現在はインターコンチネンタル系列のホテルになっており、2012年に開業150周年の記念式典が行われた。

その後ヨーロッパやアメリカの大都市のほか、フランスとイタリアの避寒地リビエラ、スイスの避暑地、それにバーデン＝バーデンをはじめとする各地の温泉リゾートには、上流階級向けの豪華ホテルが多数建設された。これらの豪華ホテルは営利企業としてよりも成功者の名誉欲の発露ないし社会貢献として発想され、利益への執心はあまりなかったといわれる。

ホテルを営利企業として確立したのは、スイスの寒村の貧しい少年から身を起こしたセザール・リッツ（1850～1918）である。リッツは下積み時代を経て各地のホテルで支配人を務め、若くしてコート・ダジュールやスイスのリゾートホテルの経営を任されるようになった。1888年にはカンヌのオテル・ド・プロヴァンスやバーデン＝バーデンのホテルとレストランを買収あるいは賃借して独立する。翌1889年にはロンドンのサヴォイ・ホテルの経営を受託し、名料理人エスコフィエとともに乗り込んで傾きかけていた経営を立て直したことは観光史の挿話としてよく知られている。ホテル経営者としての名声を得たリッツは、1891年、所有していたカンヌのホテルとバーデン＝バーデンのレストランを売却し、出資先を探していた南アフリカのダイヤモンド王たちの出資によって、リッツ・ホテル開発株式会社を設立する。リッツはこの会社の所有する各地のホテル・グループ全体の総支配人となった。彼の支配下のホテルは増える一方で、その中にはグランドホテル（ローマ）、フランクフルター・ホフ（フランクフルト）、クラリッジ（ロンドン）、カイザーホフ（ヴェイスバーデン）などが含まれている。最後にリッツ自身が自分の趣味を十分に生かして建てたのがパリのホテル・リッツ（1898開業）とロンドンのカールトン・ホテル（1899開業）であり、ホテル王といわれる立身出世を遂げた。なお、有閑階級の避寒、避暑リゾートの滞在と受け入れる側のホテルの対応、セザール・リッツらスイスのホテル業者の物語は、「国

「観光情報」2011年1～3月号に連載した『避寒地コート・ダジュールの誕生』（本ホームページに掲載）で詳しく紹介した。

### アジアのコロニアル・ホテル

西洋人は北・南米大陸や豪州大陸の原野に侵入して、原住民の存在を無視あるいは駆逐して集落をつくり、都市を作っていた。しかし、アジアの内陸部には巨大な人口が古い伝統文化とともに居住しており、東南アジアでは沿岸地域にのみ彼らの居住区を作っていた。19世紀半ばの蒸気船航路の開発、スエズ運河の開通（1869年）によって、アジアへの欧米文化の浸透と欧米人のアジア来訪がいっきに増大する。19世紀中葉まで航海者はほとんど男ばかりであったが、スエズ運河開通後の最後の四半世紀には直接船でアジアに出られるようになり、客船の居住性も飛躍的によくなって、婦女子を含むアジアへの来訪者が増えていく。客船には宿泊施設がついているから、寄港地に宿泊施設がなくても大きな問題はない。しかし、狭い空間に閉じ込められる海上の長旅のあと、人々は陸上での開放感を求めるから、主要港市に高級ホテルを建設することに商機を見出した人々がいた。

**サーキーズ兄弟** スエズ運河開通を機に、アジアにヨーロッパ人向けの豪華ホテルを展開しようとした最初の企業家は、アルメニア人貿易商のサーキーズ四兄弟であった。アルメニアは18世紀にトルコ、ペルシャ、ロシアの三大国の勢力争いの場となり、故国を去って国際貿易に従事する者が多かった。何世紀もの間シルクロードと呼ばれる内陸の交易ルート沿いにペルシャやインドとの取引に従事してきたサーキーズ一族も、1820年頃に将来性の乏しい内陸ルートに見切りをつけ、海路に生きるべくインドを拠点に活発に貿易業を営み、東南アジア方面にも支店を出していた。一族のうちの彼らサーキーズ兄弟がイスファハンを去り、イギリスの海峡植民地の重要拠点だったペナン島に現れたのは、スエズ運河開通の年1869年であった。

長男のマーティン・サーキーズ（1852～1912）は、自らスエズ運河を船で通った経験から、ヨーロッパの商人や観光客のアジアへの来訪が増え、欧米人向けのホテルが不足することを確信したという。実際、狭い船室に長い期間閉じ込められて到着する乗客は、陸上に快適な空間を求めたが、当時植民地にそれを求めても無理であった。サーキーズ兄弟は、自身の貿易業の展開のためにもホテルを所有することが有利と考え、ホテル経営をビジネスとして展開することを決意した。長兄マーティンが本業の貿易業で多忙だったため、弱冠23歳だった次兄のティグラン（1861～1912）がホテル部門の中心になった。ティグランはペナン島ジョージタウンの **Light Street** にあったヨーロッパ人の邸宅を借り上げて、1884年にイースタン・ホテルの名前で定期航路の欧米人客向けホテルとして開業した。翌1885年には、同じジョージタウンの海岸沿いにあったヨーロッパ・ホテル **Hotel de l'Europe** を買収してオリエンタル・ホテルの名で開業し、この二軒のホテルを三男アヴィエト、四男アルシャクとともに四人で経営した。1889年にはオリエンタル・ホテルを拡張改築して

一般客に開放した。この時イースタン・ホテルを売却したが、イースタンの名を惜しんで、新ホテルの名前をイースタン&オリエンタル・ホテルと改名したのであった。

**ラッフルズ・ホテルとラッフルズ卿** サーキーズ兄弟が次に開業したのがシンガポールのラッフルズ・ホテルである。1887年に海岸にあったバンガローを、10室のホテルに改造して開業した。3年後にバンガローの両脇に新ウィングを建設してスイートルームを22室つくり、これでも不足だったため、1894年にL字型のパームハウスを建てて30室のスイート等を追加し、合計75室のホテルとなった。その後1899年にはバンガロー部分を取り壊し、後期ヴィクトリア様式のメインビルディングを完成させた。これ以後、このホテルはサーキーズ兄弟が建てた9軒のホテルの中核の役割を果たしただけでなく、インド以東の最良のホテルとして王侯貴族等の上層客を受け入れてきた。

サーキーズ兄弟は、シンガポールに建てたホテルをラッフルズ・ホテルと命名した。ホテル名の由来であるトマス・スタンフォード・ラッフルズ(1781~1826)は、イギリス東インド会社の社員としてペナンに赴任したのを皮切りに、ナポレオン戦争時代にフランスに占領されたオランダ植民地(現インドネシア諸島)解放のための英遠征軍に参加し、戦争後はジャワの副総督を務めている。この時ラッフルズがジャワ島の密林の中に眠っていたボロブドール遺跡を発見したことはよく知られている。彼はマラッカ海峡を中心に、スマトラ島、ジャワ島などを東に延ばした諸島と、ボルネオからフィリピン、中国、香港、日本にかけての諸国を束ねて《東インド帝国構想》を練り上げてイギリス政府に建白したが、イギリス政府は関心を示さず、戦争が終わるとジャワ島などの島々はオランダに返還してしまった。ラッフルズの夢は挫折したが、マレー半島南端のシンガポール島を東南アジアからフィリピンや中国方面へ向かう重要拠点とすることを提案して受け入れられた。1819年から港の建設が始められ、数軒の漁師の家しかなかった寒村が港町に変身してシンガポールとなった。ラッフルズ自身はシンガポールの繁栄を見ることなく、1826年にロンドンで亡くなった。

サーキーズ兄弟は、シンガポールの生みの親であったラッフルズの名前を自分たちのホテルの名前にもらったのであった。彼らはほかに、インド洋からマラッカ海峡に入る手前の寄港地ヤンゴンにザ・ストランド・ヤンゴン・ホテルを建て(1901年開業)、マーティンの息子のルーカス・マーティンがスラバヤにマンダリン・オリエンタル・マジヤパヒを建てている(1910年)。サーキーズ兄弟はアジアに計9軒のホテルを建てたが、上に挙げた4軒は現在もコロニアル・ホテルの代表的存在として健在である。

**コロニアル・ホテルあれこれ** コロニアル形式の建築と呼ばれるのは、18世紀末から19世紀にかけて流行した新古典主義建築を植民地に持ち込んだもので、ギリシャ・ローマ風の列柱とペディメントと呼ばれる三角形の切妻をもつフロントなどが特徴とされる。ただし、持ち込んだと言っても、ヨーロッパとは違う熱帯気候に合わせて開放的にアレンジしたものである。もとはイギリス人がインドに自分たちの居住用に建築した邸宅がアング

ロ・インディアン様式と呼ばれるようになり、この建築様式をマレーシアで発展させたのがアイルランド出身の建築家ジョージ・コールマン（1795~1844）であった。彼はラッフルズのもとでシンガポールの都市計画づくりに腕を振るい、マレーシア方式ないし海峡スタイルと言われる独特の様式をつくりあげた。ルーバー付の広い窓、オープンエアの渡り廊下、高い天井、ベランダをつける、などであり、こうした建築様式が広がっていった。サーキーズ兄弟に続く西欧人たちによってタイ、ヴェトナム、フィリピン、マカオ、香港、台湾、中国などにも西洋人向けのホテルが次々に建てられていった。

旅名人ブックス「アジアのホテル：コロニアルな魅力と歴史に浸る」は、現代にまで残るアジアのクラシック・ホテルを紹介している。第1章「アジアンホテルの曙」ではサーキーズ兄弟のホテル業への進出を採り上げ、第2章「アジア史を語るホテル」では開業順にバンコクのザ・オリエンタル（1878）、北京飯店（1901）、大連賓館（1907）、マニラ・ホテル（1912）、ウェエスティン・チョースン・ホテル（1912）を紹介しているほか、開業は第二次大戦後だが、蒋介石の別荘をホテルに改築した圓山大飯店（1953）、ジャーディン・マティソン商会の跡地に建てられたマンダリン・オリエンタル香港（1963）、タイの迎賓館として建てられたエラワンホテルの雰囲気の一部残して改築したグランド・ハイアット・エラワン、マカオのポルトガル植民地時代の城塞跡をそのまま使ってホテルにしたポウサダ・デ・サンティアゴ（1981）などを採り上げている。これらはいずれもホテル建設に係わる歴史的逸話、愛用した政治家、作家、芸術家、学者など著名人などの秘めたる物語を紹介していて興味深い。

一つだけ、タイ最古の洋式ホテルであるザ・オリエンタル・バンコクの例を挙げてみよう。タイは1855年まで外国との交易を拒否する鎖国状態にあったが、開国してからは、汽船がチャオプラヤ川を遡ってバンコクの岸辺にまでやってきた。オリエンタル・ホテルのルーツは、1887年にデンマーク人の元船員がチャオプラヤ川沿いに建てた10室ほどの小ホテルであった。彼は数年後に引退し、あとを同国人の船長H.N.アンデルセンが引き継ぎ、需要増を見込んで二階建て40室のホテルに建て替え、飲食施設なども充実させ、西洋人の間で高級ホテルとして知られるようになった。1889年には、時の国王ラーマ五世（在位1868~1910）自ら同ホテルを視察に訪れている。1892年にはアンナ・レオノーエンス夫人の息子ルイス・トマス・レオノーエンスがこのホテルの経営を引き継いだ。アンナはラーマ五世の子供たちの英語の教師として雇われ、その時の経験をもとに書いた小説を題材にしたハリウッドのミュージカル映画「王様と私」が大ヒットしたことはよく知られている。

同書第3章「王侯貴族、富豪の香りを残す」では、ザ・ペニンシュラ（香港、1928）を筆頭にフランス植民地時代に建てられたソフィテル・メトロポール・ハノイ（1901）、ソフィテル・ダラット・パレス（ヴェトナム、1922）、ノボテル・ダラット（ヴェトナム、1935）、セタ・パレス・ホテル（ラオス、1932）、ラッフルズ・グランドホテル・ド・アンコール（カンボジア、1935）など、戦前および戦後すぐに開業して現在も続く11ホテルのほか、今は

レジデンスになっているが、ウィリアム・ホールデン、ジェニファー・ジョーンズ主演のハリウッド映画「慕情」の舞台になった伝説のレパルス・ベイ・ホテルも紹介されている。

第4章「レトロな雰囲気を創出」は伝統文化を活かした豪華なリゾートホテル11軒の紹介であるが、省略する。

### 3. アメリカのホテル発展史

近代的なホテルの展開は、意外なことにヨーロッパよりもむしろ新興国アメリカ合衆国のほうが速かった。ホテルが単なる宿泊施設ではなく、歴史の浅いアメリカではVIPを迎える迎賓館的施設として、また、公的な集会や社交の場所として必要とされたからである。アメリカの観光産業の発展については、ここまで採り上げてこなかったのが、最初期のホテル開発にまで遡って、アメリカの旅と観光の発展の様子を見てみよう。

北アメリカ植民地は、現地住民の少ないほとんど無人の荒野にイギリス人が移住することによって始まり、大陸東部の大西洋岸沿いの河口を中心に発展した。19世紀初頭まで農業以外の産業はなく、イギリスをはじめとするヨーロッパ大陸との貿易が主たる富の源泉であった。インドのように現地住民を征服して支配する植民地と違って、アメリカ合衆国が独立するまでの13植民地はイギリス人の移住地であり、移住者たちは大英帝国の一員であることに誇りを持っていた。それぞれの植民地がイギリスの方を向いており、個々の植民地と英本国とのつながりは、植民地どうしのつながりよりも密であった。そうした植民地が結束して独立へ向けて本国と対立することになったきっかけは、七年戦争(1756~1763、アメリカ大陸ではフレンチ・インディアン戦争)による財政窮乏を補うため、英政府がアメリカ植民地からの税収を増やす目的で新税を課そうとした政策であった。

自分たちを本国人と同じ権利をもつ同胞と考えていた植民地側は、本国の一方向的な押しつけに抵抗して立ちあがった。ばらばらだった13の植民地が大陸会議を結成し、対英独立戦争(1776~1783)を経て独立を勝ちとることができた。しかし、独立後のことを考えて始めた戦いではなく、戦争が終ると結束の理由を失って団結は緩くなり、独立後の在り方をめぐって大いなる議論が起こった。1781年に作られた連合条約で州の連合による独立国とする体裁は決まったが、それは今日の国連のようなもので、中央政府は国民に直接課税することができず、国内の商業を統制する権限もなく、外国も使節を送ってこなかった。中央政府の権限が弱体過ぎることは社会不安のもとであり、改めて強力な中央政府を樹立すべく、5年がかりの議論の末、1787年フィラデルフィアにおける大陸会議において合衆国憲法が制定され、国家の体制が決められた。初代大統領には独立戦争の英雄ジョージ・ワシントン(1789就任)が選ばれ、新しい連邦政府が作られた。独立戦争によってミシシッピ川以東の領土を英国から取得したが、そこはまだ人口希薄な原野に過ぎず、1787年の土地条例によって、人口が5000人を超えればテリトリー(準州)として住民の自治を認め、6万人を超えれば13州と同格の州として合衆国に加盟することが認められた。13州以外の州はこのようにして逐次連邦に加盟していった。

1790年にワシントン大統領のもとで行われた最初の国勢調査によれば、当時のアメリカ13州の総人口は約390万人、うち白人が320万人であった。都市と呼ばれるに値する都市は全部で5つ、約42,000人のフィラデルフィア（首都）、33,000人のニューヨーク、18,000人のボストン、16,000人のチャールストン、13,000人のボルティモアであった。大部分が農園または大農場から生活の資を得、小さな村に住み、交通・通信網である道路も駅馬車も粗末で、ほとんどが孤立した状態で暮らしていた。入植以前に道路はなかったから、川が交通の中心であり、川では行けないところから先に道路がつくられていくのだが、まだ陸路は未開発状態だった。

**ワシントン大統領の国内視察旅行** サンドヴァル=ストラウス A.K. Sandoval=Strausz の「アメリカ・ホテル史」Hotel: An American History は、1789年、大統領に選出されたばかりのジョージ・ワシントンが、少数の官僚と従僕だけを供に連れて視察旅行に出かけるところから始まっている。印象的な書き出しである。ワシントンは、大統領になると同時に各州の農業の実情を知り、出来たばかりの連邦国家に対する各州・各地の考えを聞いて連邦の基礎固めをするために、13州全部を視察することにしたのであった。宿泊施設が整備されていない当時のこととて、各地の有力者や友人知己が宿舎の提供を申し出たが、ワシントンは公正公平な政治のために、少しでも依怙鬚眉の印象を与えたくないとの思いから、公的な宿（パブリック・ハウスやタバーン）のみ利用する決意を固め、すべての申し出を断った。彼はこの方針を貫き通すのだが、北はニューハンプシャー州から南はジョージア州まで2000マイル（約3200km）に及ぶ旅は、道路はどこも荒れて石ころだらけ、快適ならざる宿に泊まる辛い日々であった。彼はそれらを日記に書きとめている。

3年がかりで13州を回る旅の第一歩は、1789年10月のどんより曇った朝、仮首都ニューヨーク発、北への旅立ちであった。騎乗の旅である。作物や牛豚などの家畜の様子を視察するうちに日が落ちてきて、最初に泊まった宿はニューヨークから36マイルのライ Rye の町の《スクウェア・ハウス・イン》であった。彼は宿に泊まるたびに何がしかのコメントを綴っている。北へ向かう旅では、今日の宿はよかったと書く日もたまにはあったが、次第に不満がつづいていく。ひどい宿だったと書くこともあれば、迎えてくれた人たちは良い人たちだったが、パブリック・ハウスの施設は粗末すぎる、というような記述が続く。南への旅はもっとひどく、ノースカロライナでのある一日は、雨に降られて投宿しようと立ち寄った町の一軒だけのインの汚なさが、人にも馬にも耐えがたいほどだったので諦めて再び雨の中を出立した、といった具合である。ワシントンのこの視察の旅は、その後のアメリカのホテル改善に資するところが大きかった。ともあれ、当時のアメリカ合衆国最良のパブリック・ハウスはフィラデルフィアの「シティ・タバーン」で、間口50フィート（約15m）ほどの3階建て、部屋数およそ20室、建物の価値は15,000ドル程度だったという。それが20年後の1809年になると、最大のパブリック・ハウスは7階建てで200室を有し、価格は50万ドルを下らないというところまで発展するのである。

**タバーンの時代** パブリック・ハウスとは、サンドヴァル＝ストラウスによれば、アルコール飲料を供し、旅人に宿を提供する施設の正式名称である。タバーンと呼ばれたりインと呼ばれたり、時にはオーディナリと呼ばれたりもするが、概ね同じようなものと考えていいという。個人の住宅に対比して誰にでも開かれたスペースであることを意味するが、きちんとした区別はない。イギリス植民地時代のアメリカは、様々な移民の集団が、空白地あるいは現地住民の存在を無視して住みつき、そうして出来上がった集落は閉鎖的で、よそ者に対して警戒を怠らなかつた。各植民地の政府は、飲酒やギャンブルなど秩序を乱す恐れのある行動を制御しうる人物にしか酒類販売を認めず、秩序維持を怠ると許可を取り消すなり罰金を科すなどして、よそ者の受け入れと監視の責任をパブリック・ハウスに負わせた。言い換えれば、政府にとって、タバーンやパブリック・ハウスは政府に許可の手数料と税金をもたらし、旅人に避難所を与える公の義務を代行し、全体として秩序維持にも役立つという一石三鳥の存在であった。すべての町に1軒以上のパブリック・ハウスないしタバーンがあり、ほとんどがアルコールを供していた。後年1973年に行われたコロニアル・ウィリアムズバーグ財団の調査が、この時期のヴァージニア州のタバーンの室数は6～10室であったことを実証したが、近年の調査では、北部のマサチューセッツやフィラデルフィアでも規模は同じであったという。

タバーンの内部は厨房、バー、パブリックスペース、寝室、それに主人一家の私的な生活の場があり、わずかなスペースを適宜配分して臨機応変な使い方をしていた。泊り客が多い時には、パブリックスペースの炉辺をも寝る場所に転用し、客が多ければベッドをシェアさせるのが普通であった。さる旅行者の日記は「ベッドに入ってしばらくすると、見知らぬ奴が部屋に入ってきて、服を脱ぐと挨拶もなしにシーツの中にもぐりこんできた」と書いているし、別の例では、宿の亭主が酔っぱらってよろけて回るので、自分の上に倒れこんでくるのではないかと心配で眠れなかつたと書いているから、こちらはパブリックスペースに寝かされていたのであろう。客が多いと一つベッドに他人と同衾するのも普通のことであった。例えば1851年刊行のハーマン・メルビル「白鯨」の冒頭で、語り手のイシュマエルが捕鯨船に乗り込む目的で港町の宿スパウト・イン（潮吹亭）に泊まり、食人種出身のクイーケグなる銚打ちと同じベッドに寝る場面が面白おかしく語られる。この時の経験から二人は無二の親友になって、エイハブ船長の捕鯨船に乗り組むのである。その描写によれば、ベッドは銚打ち四人が寝られる広さがあると書かれているから、小さなベッドに見知らぬ者どうしが体をくっつけるように寝るのでないことは確かである。「白鯨」は19世紀半ばの小説だから、相当長期にわたってこういうインがあつたとみてよいであろう。日本の昔の旅館では、畳の部屋に別々に布団を敷いて他人が同室で寝るのが当たり前であつたように、一人1室とはいかない以上、ベッドに寝る習慣の西洋人は、大きな部屋に大きなベッドを入れて、一緒に寝るのは当然であつた。こうした事情はヨーロッパでも同じであつた。私事ながら、1970年代のはじめにフランスの田舎をドライブしたとき、街道の古めかしいオーベルジュ（イン）に泊まったことがある。バーで同僚と一杯やって入

った部屋がまさに超大ダブルベッドが二つ入った寝室であり、そうした昔の慣習を垣間見た気がしたものである。

それでも、植民地時代末期の 1772 年に建設されたフィラデルフィアの「シティ・パブリックハウス」は、先述のとおり 3 階建てで、植民地最大のタバーンとされていた。独立宣言後にフィラデルフィアが一時首都になったのも、人口最大の都市であったほか、このタバーンに各植民地代表を収容できたことが一因であると言われている。連邦発足後に立派なホテルを新首都となる予定のワシントンに建てようとした理由も同じである。

### タバーンからホテルへ：第一世代のホテル

ホテルという言葉は非常に大きな建物にしか使用されなかったから、19 世紀の初期まで、ホテルはパブリック・ハウスとはまったく別のものと思われていた。その意味でサンドヴァール＝ストラウスは、アメリカ最初のホテルはどれかという疑問に答えることから始めている。最初の試みはワシントンに首都の移転が決まり（1790 年）、商人であり保険業の創設者と言われるサミュエル・プロジェクト、Jr.（1757~1814）が創案したホテル「ユニオン・パブリック・ホテル」であるとする。

**失敗したユニオン・パブリック・ホテル** プロジェクトは 1784 年と 1790 年の二度ヨーロッパに行き、ヨーロッパの建築学を学んできた。独立戦争時にジョージ・ワシントンと親交をもち、《事業の天才》と評価された彼は、1793 年新首都ワシントンの建築主任に任命された。大統領官邸（ホワイトハウス）と国会議事堂はすでに建築中であったから、次に必要なのは新首都にふさわしい《パブリック・ハウス》の建設であるとして彼が提案したのが「ユニオン・パブリック・ホテル」であった。しかし、連邦政府に新しい大型公共事業に充てる予算がないことはわかっており、彼はこれまでの自身の資金調達の実験から、《ナショナル・ロトリー（全国宝くじ）》の販売によって建設資金を調達する計画を立てる。政府の承認を得て「連邦新首都建設のためのロトリー」を販売し、全国の新聞その他の媒体に広告を出して資金を募った。1 枚 7 ドルで総額 50 万枚を売り出し、5 万ドル相当のホテルを建設する予定であった。結果はプロジェクトの資金管理に問題があり、工期が遅れて資金不足に陥り、プロジェクトのホテル建設構想は頓挫した。しかし、建物自体は立派に出来上がり、その頃には公務員や議員のための宿舎も出来上がっていてホテルの需要は少ないとみられ、結局連邦政府が買い上げて郵便局と特許局の事務所に転用した。ちなみに、ホテルの目的で建てられたこの建物の設計者は、ホワイトハウスを設計したジェームズ・ホーバンであり、これが新首都においてホワイトハウスと議事堂に比肩しうる唯一の建造物であった。首都ワシントン（ワシントンの死後に命名）は、米英戦争（1812~14）時に英軍に攻撃されてホワイトハウスも議事堂も被災し、プロジェクト創案のこの建物が 2 年間議事堂の代わりに使われている。

プロジェクトのホテル・プロジェクトはかくして失敗に終わったが、全国に呼びかけたホテル建設計画は多くの企業家に刺激を与え、これ以後主要都市に大型ホテル建設の機運

が盛り上がる。新興国の大都市にとって、ホテルは欠かせないインフラのひとつという認識が広がっていくのである。

**ニューヨークのシティ・ホテル** 1793年春、プロジェクトのロトリーLotteryの募集広告が出て間もないころ、ニューヨークの大企業家たちがグループを結成し、同市で一番大きく立派なシティ・タバーンを6000ポンドで買い上げ、これを解体した。当時これは奇妙な行動に見えた。シティ・タバーンはニューヨーク市が賓客を迎える際の接遇の場であり、ラファイエットやジョージ・ワシントンもここに泊まっているし、市のリーダーたる企業家たち自身が頻繁に会議を開く由緒ある場所でもあったからである。その疑問は秋に氷解した。グループがその跡地にシティ・ホテルを建設する計画を発表し、そのデザインを公募したのである。サンドヴァル＝ストラウスは、このプロジェクトは彼らがプロジェクトのホテル建設計画を知った後の計画であるという。結局、ブロードウェイに面する側が幅80フィート、テンプル通り側は120フィートの3階建ての建物が出来上がり、内部には様々な機能をもつスペースが設けられた。1階と2階にはロビー、宴会場、バー、店舗、事務所などが並び、3階に合計137の寝室が設けられた。これが当時のニューヨーク最大の建物となり、市最大の教会の尖塔部分を除けば高さも最高であった。建築費の10万ドルは、ウォール街に新しく建てられたニューヨーク株式取引所に次ぐ最高額で、ニューヨークに存在するビルディングはまだこの二つだけであった。シティ・ホテルは、開業以来40年間にわたってニューヨーク最大のパブリック・ハウスとなり、訪問客の宿泊とパワーエリートたちのビジネス・ミーティングの場所兼社交の場であり続けた。これが成功した最初のホテルであった。

ユニオン・パブリック・ホテルとシティ・ホテルという二つの事例とワシントンの失敗事例を含め、ホテル建設の試みは他の大都市に大いなる影響を与えた。ホテルが都市の重要な顔と考えられるようになったのである。しかし、ニューヨークとボストンの他に州都で試みられたニューポート（ロードアイランド州）、リッチモンド（ヴァージニア州）のプロジェクトはいずれも資金集めに失敗していることでわかるとおり、高額な建築費を集めることが困難であり、公的空間としての巨大ホテルは、それなりの立地と条件が整っていなければ成り立たないことを証明しただけで終わっている。

**ボストン・エクスチェンジ・コーヒーハウス&ホテル** 3年連続で宿泊施設を含む公的な建造物（パブリック・ハウス）建設案は企画倒れに終わった。後世から見れば、時期尚早ということになるであろう。少なくとも1806年に、ボストンの有力商人や金融業者らが勢ぞろいして「ボストン・エクスチェンジ・コーヒーハウス&ホテル」を建設するまではそのように見えた。ボストンのこの建物は、当時としては常識はずれの巨大な建造物であった。7階建てで地下室もあり、建坪約1650㎡、幅は40mあり、玄関口をイオニア式列柱6本が囲んでいた。内部には5階まで吹き抜けのバルコニー付大広間が作られ、上方にフロア

からの高さが 25m もあるドーム屋根が乗せられた。当時のお金で 50 万ドルをかけた豪壮な建造物で、多様な目的に使用される部屋の数は全部で 200 室に及び、合衆国最大のビルディングとなった。ニューヨークのシティ・ホテル同様、ここも有名人たちの溜まり場であり、社交場であり、ビジネストークの場であった。金融センターでもあって、多くの金融業者、保険業者などがこの建物に事務所を構えた。その後もホテルはいくつか建てられたが、このボストンの巨象に及ぶものはなかった。「ボストン・エクスチェンジ・コーヒーハウス&ホテル」は開業以来繁栄を続けたが、サンドヴァル＝ストラウスの言葉を借りれば、ギリシャ神話の傲慢の女神ヒュプリスの罪に問われたのか、1818 年、屋根裏に火災が起きた時、高過ぎるゆえに届く梯子がなく、焼け落ちてしまった。わずか 12 年ほどの輝かしき存在で終わったのであった。

### 第一世代のホテルの特徴

サンドヴァル＝ストラウスは、ここまでの第一世代のホテルの特徴を経済、文化、政治の 3 分野と関連させて説明している。概要は以下のとおりである。

**経済との関わり** 第一は、新しい経済との関わりである。ホテルはタバーンとは異質の存在であり、建造に巨費がかかり、それ自体が大なるベンチャー・ビジネスであった。投資家は当然投資の見返りを求めるから、彼らはホテルを採算が取れる事業と見ていたと考えてよい。この時期のアメリカの企業家は、ほとんど例外なく海外貿易で産をなした人々であった。サミュエル・プロジェクト、Jr. は東インド貿易で財産を作り、彼の保険会社は海運保険が主体であった。ニューヨークのシティ・ホテルを生んだグループは、全国最大のニューヨーク港を利用する商人グループと、彼らの契約や法律事務を扱う法曹家たちの結合であった。彼らは例外なくアメリカ、ヨーロッパ、東アジアをめぐる国際資本の体現者であった。21 世紀の現在からみれば何の不思議もないことだが、1790 年代のアメリカ国民の 90%以上がプランテーションや自営農業、牧畜で生計を得ており、国際貿易で巨富を得る者はほんの一握りの存在でしかなかった。商人とは、距離と時間差を利用して利益を上げる人々のことであり、商業というビジネスは人と物の輸送力やそのシステムに依存することをわきまえている人たちであった。彼ら自身もその父祖も、道路や橋、水運、通信などのインフラの改善に投資してきた人々だったのである。

第一世代のホテルの場合、経済の観点で見るとしても、ホテルの機能だけを見たのでは重要な視点を失う。この時期のホテルは、ビジネス機会であるだけでなく、建築の造形や装飾によって商業のステータスを高めるといった目的を持っていた。外観自体が農業を脱して商工業を発展させていく国の未来像の象徴と考えられていたからである。彼らが拠点とするホテルは、当時の二つの政治勢力、過度の商業化は健全な農業社会を破壊するというジェファソン派共和主義者<sup>リパブリカン</sup>と、商業の活性化なくして国の将来はないとするハミルトン派連邦主義者<sup>フェデラリスト</sup>との戦いの場でもあった。失敗したユニオン・パブリック・ホテルやニューポートほかのホテル計画も含め、巨大な石造ホテルを作ることによって、商人らは議論を有

利に展開しようとした。巨大ホテルはそれ自体が注目を集めると同時に、高層階の窓からは、港にどの国のどの会社の貿易船が入港してくるかが見えるようになっていた。その存在自体が彼らの理念の伝達方法の一つだったのである。端的に言えば、初期の巨大ホテル建設の目的は、1) 旅するエリートたちに安眠とリフレッシュの場を確保することによって貿易を促進し、2) 大建築（ビルディング）を作ることによって周辺の不動産価値を高め、3) 目に見える豪華な建造物をつくることによって、農業一本やりの国に新しい繁栄の方向を示そうとしたのであった。

**社会と文化との関わり** 第二は、この時代の社会と文化との関わりである。外観が海洋交易や大陸間貿易の象徴であったとすれば、内部はホテルが建てられた社会の人間関係や文化を反映していた。ヨーロッパでは貴族をはじめとするエリート階層の特権が次第に浸食される時代に入っており、それぞれのステータスを住宅、衣装、銀器類、装飾、行動様式など、目に見える外観によって表現する傾向が顕著になってきていた。もともとアメリカのエリート層の生活はロンドンの貴族生活の植民地版であり、その傾向がパブリック・ハウスの在り方にも影響していた。上述の18世紀後半のフィラデルフィアのシティ・タバーンや、エレガンスを意識したいくつかのパブリック・ハウスは、その傾向を反映するものであった。ゆえに、ホテル内部の設備や装飾は、アメリカのエリート層がマナーや生活用品などに求めるエレガンスにマッチしたものとなった。彼らは自分のステータスを誇示すると同時に、相手のそれをも承認する必要がある、それには自分を見せ、他者を見る適当な場がなくてはならなかった。アメリカの場合、ホテルはまさにその場として作られたのである。ドレスアップして登場し、品のいい立ち居振る舞いとウィットに富んだ会話を楽しむ宮廷風の環境を、彼らはゼロから作り出さなければならなかった。ラトローブが作成したリッチモンド市のホテル計画のスケッチが残されているが、ヴェルサイユ宮殿の鏡の間を思わせるボールルームが描かれている。ボストンのエクステンジ・コーヒーハウス&ホテルも同様で、実際にボールルームを含む社交目的の部屋がいくつも用意されていた。

**女性の利用客とホテルの客層分離戦略** もう一つ、ホテルとタバーンの決定的な違いがある。タバーンは本質的に男性オンリーの場であったことである。タバーンは、男性客が飲酒しながら親睦を深め、相互にステータスを確認し合う場であって、男性客にサービスする女性はいても、女性の客はいなかった。男性客の付添でたまたま女性が中に入ると、男性客の視線を浴びて不快な思いをさせられる。そういう思いをした女性たちの証言が沢山残されている。第一世代のホテルでは、最初から上層階級の女性客を歓迎して、タバーンとの違いを明確に示している。女性たちもホテルで開催される様々な行事に参加し、ホテル側は女性客が男性たちの目に晒されて不快な思いをしないよう配慮し、他方では、その場に不適当なステータスの人物が入り込まない工夫がなされるようになる。

アメリカのタバーンはもともと様々な出自の人々のたまり場で、親方も見習いも、役人も労働者も同席して飲んでいて、それなりに相手の立場を尊重する雰囲気できていた。

しかし、独立戦争以来の平等思想の普及によって、自分の身分を意識する上流層と上流層を妬みがちな下層階級との関係がぎくしゃくする傾向が生まれていた。重要人物らしき人の上から目線の冗談や思いやりの発言が以前のように受け入れられなくなり、些細なことで劣等感からけんか腰の反抗を見せたり、下手をすると拳骨をふるうなどの修羅場が起りやすくなっていた。

ホテルの空間は、タバーンがはらむ独特の緊張感を《排他と分離》という戦略によって緩和する工夫がなされていた。すなわち、ホテル内の雰囲気やエレガントな装飾は、それにふさわしい服装とマナーを身に着けた人のみを受け入れることを暗示し、社会的な軋轢は空間を隔てることによって解消した。このことは寝室スペースでも同じであった。タバーンでは寝室部分が公共部分と明確に区分されていないことが多く、区分されていても同じ部屋、あるいは同じベッドを他人と共有することが当然視されていたが、ホテルではそうした慣習を排除した。ホテルでは、身分やステータスを見かけや物理的な隔壁で区別するだけでなく、政治的な主張を異にするグループをも隔離することができた。植民地時代には、ヨーロッパの都市のように人が集まれる公共的な場所がなかったから、政治が問題になると人々はタバーンに集まって議論するのが常であった。ニューイングランドでは、飲酒を制限しようとする宗教家や行政官に反対する勢力がタバーンに集まったし、タバーンの客たちは植民地総督のやることに気に入らなければ、いつでも抵抗の氣勢を上げてきた。そうした行動や慣習が独立運動に結びつき、独立宣言に先立つ10年間、タバーンはイギリス王権に対する抵抗運動の拠点として機能してきたのであった。独立宣言後の1780年代も引き続きタバーン・ミーティングは生き続け、外国からのニュースがあれば集まって議論し、市の行政官を選挙し、政治的主張の演説を行う場であり続けた。パブリック・ハウスないしタバーンと政治は切っても切れぬ関係にあったのである。

アメリカの大都市がかつて存在したことの無い巨大ホテルを建て始めた時、建設者たちの念頭には、ホテルを政治の中心地とする気持ちがあった。植民地時代には少数の親しい者たちだけの意見交換で物事を決めることができたが、彼ら自身が独立共和国の行政官や議員となって政治を行う立場になると、個人の行動や見ばえ、説得力や反論の仕方などが大衆に見られ、吟味され、支援を得るために必要な能力であることを認識する。

1780年代から90年代にかけて、初代ワシントン政権のハミルトン財務長官のフェデラリストとジェファソン国務長官のリパブリカンの間に深刻な党派争いが生じていた。駐仏公使としてパリに滞在し、フランス革命勃発の瞬間を体験したジェファソンは、フランス革命政権に同情的で共和派を形成したのに対し、エリート層を背景に持つハミルトンは連邦派の代表であった。ホテル創建者たちはほぼすべてフェデラリスト（連邦派）であり、新しい政治のための空間を創造する必要があると考えた。リパブリカン（共和派）は連邦派の貴族的秘密政治を批判して街頭示威行動などを行い、連邦派はそうした大衆の扇動を危険な行き方とみて対立した。それゆえ、ニューヨークのシティ・ホテル建設には、政治の議論を街頭で行うのではなく、それに相応しい立派なパブリック・ハウス（ホテル）を

建て、ふさわしい環境で行いたいというフェデラリスト側の期待が込められていた。ボストンのエクステンジ・コーヒーハウス&ホテルの建設にも同じような事情が絡んでいたものであった。

**ホテルは迎賓館** 18世紀末といえば鉄道はまだないし、川を遡る蒸気船もなかった。ヨーロッパにも大型都市ホテルがなかった時代に、どうして独立したばかりの弱小農業国だったアメリカに突然大ホテルが誕生したのか。長年パブリック・ハウスやタバーンで事が足りてきたアメリカの大都市（といってもせいぜい人口は3~4万人ほど）に、なぜホテルが次々に建てられることになったのか。サンドヴァル=ストラウスは、その理由として、アメリカ合衆国の独立と選挙による大統領選出、新首都の建設、連邦行政官の誕生と活動など、アメリカ人であるという国民意識の芽生えと政治地理の再構成という時代背景を上げ、ホテルもまたその一環として誕生したのだと主張する。

ばらばらだった植民地が結束して独立し、一人の生身の人間に国を代表させるという仕組みをアメリカは誕生させた。ワシントン大統領が特定の人物や特定の勢力に偏る印象を与えないよう、あえて公的な施設のみを使って視察の旅に出たことはすでに述べた。独立戦争の英雄だった大統領は、行く先々の市や町の住民に熱狂的に迎えられた。歓迎のバナナの掲出はもちろん、行列行進や歓迎ディナー、お祭り騒ぎすらあった。しかし、ヨーロッパの市や町のように、賓客を迎える伝統もそのための迎賓館に相当する城館や領主の別荘のような施設はなかったから、大統領が私人の家に泊まることを謝絶したとき、迎える側は大いに苦心した。大統領が既存の公的施設に宿泊したという事実は、当時のパブリック・ハウスやタバーンが重要人物のための宿泊はもちろん、歓迎の集いの場としてふさわしくないことを白日の下に晒したのであった。ワシントンの日記は、タバーンの実情に不満を述べる一方で、時には一時的にパブリック・ハウスにしつらえられた有力者の邸宅に迎えられたことを本人も理解していたことを示している。公的なディナーやレセプションでも、各地で同じような配慮が示された。大統領を迎えるにふさわしい施設も食器類などの設備もない市町村の戸惑いや苦悩を示す資料が沢山残っている。直接的に大統領に粗末な歓迎しかできなかつたことを詫びた手紙もあるし、他のコミュニティと歓迎ぶりを比較されたり、それで大統領への忠誠心を判断されることへの不安さえ示されている。

長い歴史と伝統のあるヨーロッパと違い、アメリカには公用目的に使用される公共建造物自体がほとんどなかった。それゆえ、多くの都市で賓客の宿泊、エリート層の社交、ビジネス・ミーティングの場所を提供する多目的公共建造物の必要性が痛感されたのであった。失敗プロジェクトを含む第一世代5ホテル以前にも、類似の試みはあった。たとえば、連邦政府がニューヨークからフィラデルフィアに移転した直後の1790年、フィラデルフィア市は使われなくなった学校の建物を買収して迎賓館に転用しているし、1800年までにポトマック川の無人の原野に連邦首都を新設すると決まった時、連邦市（ワシントンの死後ワシントン市と名付けられる）に最初のホテル建設が計画されたのもその必要性からであった。当然それは国を代表するに足る立派なものでなくてはならなかつたし、その発想は当時の州

都であったニューヨーク（ニューヨーク州）、ニューポート（ロードアイランド州）、ボストン（マサチューセッツ州）、リッチモンド（ヴァージニア州）に二、三、四、五番目のホテルが実際に、あるいは建設のためのプロジェクトが誕生した背景でもあった。

第一世代のホテルは、建造物の巨大さと立派さによって共和国が備えるべき宿泊施設のあるべき姿を示したという意味で後に残した影響は大きかったが、すでに見てきたとおり二つを除いて実現せず、事業としては失敗であった。1789年にワシントン大統領が巡回旅行に出かけて以来、迎賓館的な施設が必要と認められはしたものの、旅客移動はまだごくわずかだった。第二世代のホテルが登場するのは、ナポレオン戦争（1799~1815）と米英戦争（1812~15）を経て、アメリカがアパラチア山脈以西や五大湖方面に向かって開発の動きを始めてからのことになる。領土が拡大し、フルトンの蒸気船発明によって川の遡航が可能になり、運河の建設、道路や橋の建設が進み、鉄道が登場する頃になると、ホテルが採算の取れる事業になってくる。アメリカでは、国土開発と経済の発展は、まず交通・通信網の整備から始められなければならないほど交通とホテルの普及がリンクしていたのであった。

1812年に米英の対立が戦争に発展したことによって、第一次のホテル建築時代は終わりを告げた。米英戦争は対外貿易を途絶させ、多くの商人たちを破産させた。アメリカ人の多数派はホテルおよびその利用者層に対して批判的、敵対的さえあり、ホテルの将来に明るい展望が見えなかったからである。

**交通革命と内陸開発** 米英戦争はアメリカにとって大きな転機になった。1814年12月に講和条約が結ばれ、1815年からアメリカの新時代が始まる。独立国家であることを再確認してナショナリズムが高揚し、対英貿易が途絶したことによって国内に必需品を生産する工業が誕生し、肥沃で豊かな農業を約束する内陸部の土地を求めて西へ向かう開拓移住が始まったのである。フロンティアが西部へ広がり、次々と新しい州が成立する。インディアナ州（1816）、ミシシッピ州（1817）、イリノイ州（1818）、アラバマ州（1819）、ミズーリ州（1821）と急速であった。国内商業も急速に発展して物流が活発化し、海外貿易も復活した。

経済成長はアメリカにおいてはとくに交通運輸インフラの整備と連動した。農民は余剰の生産物を販売したいし、工業者も製品の販売に輸送が欠かせない。これまでのアメリカは大西洋岸に流れ出す川を遡る範囲の内陸に物資を運んだが、本格的な内陸開拓はセントローレンス河、ミシシッピ川、オハイオ川流域だけの交易にとどまっていた。北方の川は冬期には凍結して水運は途絶し、川の流れから遠いところへは陸上を畜力と人力で運ばなければならなかった。それ以上に、川の輸送は下りはよくても、上りは岸辺で船を引いて上がるか陸路を畜力と人力で運ぶしかなかったから、大変な労力とコストがかかった。誰であれ、輸送手段を開発する者は巨万の富を保証され、他方、新設コミュニティは、物資の集結と配送の拠点になりさえすれば繁栄が約束される状況にあった。ゆえに、平和が戻った1815年を境に交通革命が始まるのである。

まずは道路交通の改善である。州の認可を受けた企業が有料道路（ターンパイク）を競って建設し、1830年までに数千マイルの舗装道路ができあがった。次が川を結ぶ運河や新水路の建設による水運ネットワークの整備であり、転機は蒸気船の開発であった。1810年代にアメリカで誕生した蒸気船は、上下両方向の水上運送を可能にし、輸送力を激増させ、結果として運送コストをドラスティックに引き下げて経済を活性化させた。第三が鉄道である。鉄道はどこにでも敷設でき、シーズンを問わず24時間使用できるから、アメリカの経済地図に一大変化をもたらした。既得権を持つ開発への敵対勢力は存在せず、労働力は常に不足していたから、機械化と合理化は必然の方向であり、ひたすら歓迎された。

物が動くためには人が動かなければならない。物を扱うのは人であり、輸送する手段を動かすのも人だからである。既存の町の存在しないところへ開発の足が向かうのだから、当然そうした人々の宿泊や飲食・休憩の場所が新たに確保されなければならない。かくして、ホテルの建設はコミュニティ経済の発展に直接リンクしていたから、アメリカでは交通とともにホテルは公共事業の一環と見做されたのであった。

## 第二世代のホテル（1815~40）

ホテルの存在がコミュニティにとって必要であることは、第一世代のホテル誕生によって理解され、承認された。米英戦争終結後、すぐにいくつかのホテル建設の試みがなされたあと、1820年代に入るとホテル建設ブームが訪れておよそ10年続く。この時代のホテルは、大胆な投資家と有能な技術者や職人、デザイナーなどの力を結集して建造され、しかも、第一世代のホテルと違って大衆的な存在になっていく。大勢の庶民が訪れてホテル内のロビーやパーラー、店舗や事務所や図書館などを利用し、真にシヴィックセンターの様相を呈するようになる。アメリカ人はこぞって昔のタバーンの価値ある後継者を作り出そうとしているように見えた。これが第二世代のホテルの特徴である。

第一世代のホテルがエリートだけの集会場であり、宿泊施設であったのに対し、この時期に登場してくるホテルはコミュニティ全体のための存在であり、エリート向けの施設という性格は薄められていく。ホテルは庶民の殿堂でもあるという姿に変わったのである。アメリカの総人口は1800年に524万人だったが、1820年には964万人に増え、1850年には2300万人へと50年間で4倍以上に急増する。

ただし、第二世代のホテルの展開は1820年代初めまでは数も少なく、第一世代に比べるとはるかに質素なものばかりであった。たとえば、1816年にリッチモンドに建てられたユニオン・ホテルは南部初のホテルであったが、それまでの慣習に従って州都に建てられた。リッチモンドの人口はやっと1万人に届く程度で、同州内の繁栄する港町ならその2~6倍の人口を有していたから、変則的な存在であった。1819年にはさらに小さな町セントルイスに西部最初のホテルが建てられる。地方の企業家2名が建てたミズーリ・ホテルがそれで、これは2階建ての石造建築であった。同じ年、コネチカット州ハートフォードの町の中央に多目的ホール、食堂、読書室などを併設したホテルができた。他には、ミシガン

の森の中に移住民誘致を狙った投機者たちが円柱付玄関のある 24m×48m の大きさのオタワ・ハウスというホテルを建てたが、これは移住者や投資家の誘引に失敗してまもなく撤去する羽目に陥っている。

ホテル建設が遅々としているからといって、アメリカ人の宿泊需要が減退していたわけではない。むしろ多くの市や町がホテルに準ずる施設をもつべく様々な努力をしている。巨大建築を新築するまでには至らないが、ワシントンでは通常の家屋が沢山の小ホテルや下宿屋に転換されているし、ボルティモアでは 1818 年に 18 世紀のタバーンを改築してインディアン・クイーン・ホテルを新装開店している。ニューヨークでも同様な方法によって 2 軒の古い大理石造りの建物を 1 軒のホテルに建て換え、フィラデルフィアでは 1822 年に築 32 年のワシントン・タバーンを改築してニューシアター・ホテルというのをオープンするなど、様々な試みがなされていた。

ホテル経営を志す者たちが米英戦争終結後の 10 年ほどの間、大型のホテル投資をためらったのにはもっともな理由があった。まず、第一世代のホテルの失敗は広く認識されており、それらの失敗事例が多額の労働力、資本、経営コストを要するホテル・プロジェクトに二の足を踏ませていたこと。他方、成功した既存ホテルの華やかな存在は、新たな投資に向かわせる勇気をくじくものであった。ニューヨークのシティ・ホテルは大盛況だったし、ボストンのエクステンジ・コーヒーハウス&ホテルも、10 年間はボストンの商業と社会に君臨していて、これらに対抗しうるホテルを作ることは至難だったからである。それに、マクロ経済学的に見ても、1808 年のイギリスによる貿易規制導入から後の 15 年間は、アメリカ経済の投資環境は比較的悪かったのである。

**第二次ホテル建設ブーム** ホテルの機能に対する高い評価にもかかわらず積極投資が行われなかったという事実は、ホテルの実験段階は過ぎたものの、まだ見習い期間とでもいうべき試練の変遷期にあったことを示している。あるいは、宿泊施設が交通網の発展状況を反映していたともいえる。すなわち、交通革命は始まったものの、勢いがつくにはもう少し時間が必要でだったのである。

ターンパイクであれ、運河、蒸気船、あるいはホテルであれ、インフラ開発への熱意は、国内開発の投資が生きるという明確な合図を待っていた。そして、その合図はそう長く待つまでもなかった。ホテルは不可欠だがホテル建設投資はリスクが大きいというそれまでの意識が、間もなくホテルを持たないことはそれ以上のリスクであるという観念に切り替わっていく。1820 年代半ばには、都市にとってホテルは繁栄のための不可欠な要素という認識に変化した。開発途上の大陸では、ホテルの存在と質が町や市のロケーションの良否を示す指標と考えられるに至ったのである。良いホテルがある町は繁栄する町、というわけである。無から有を生じるアメリカならでは意識構造である。

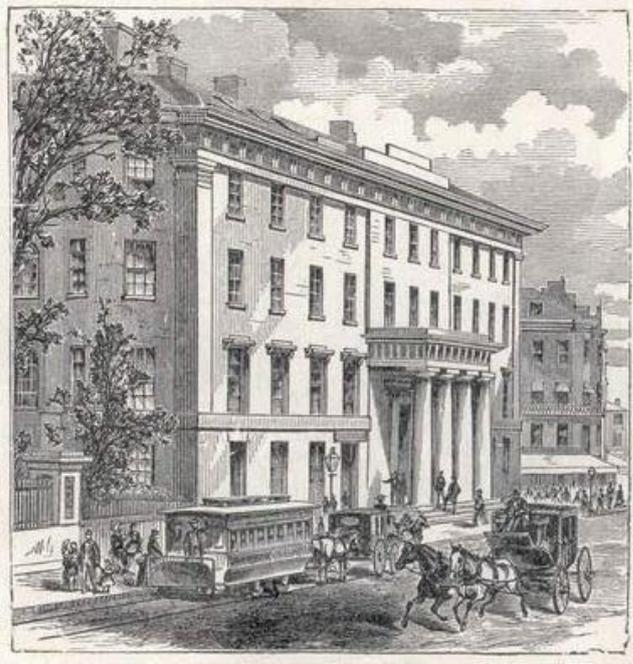
そうした意識変化をもたらしたきっかけは、1825 年のエリー運河の開通であった。1817 年に始められたこの壮大なインフラ整備事業は、長年のアメリカ国民の期待を背負って掘削され、ついにハドソン河の支流モホーク川からエリー湖の東端バファローまで水運でつ

なくことに成功した。全長 584 km、幅 12m、深さ 1.2m、高低差を移動するための閘門が 83 か所も設けられた。1825 年 10 月 25 日の開通式には、時のニューヨーク州知事デウィット・クリントン以下のお偉方がバファローで乗船し、10 日間かけてニューヨーク港まで下り、10 万人の歓呼を受けながらマンハッタン通りを行進した。エリー運河は大西洋岸と五大湖地方からオハイオ川流域にかけての地域を水運で連結することによって、東部と中西部間の輸送コストを 10 分の 1 に引き下げた。広大な地域を農地に換え、移住地を拡大し、ニューヨーク市の後背地の大開発を促し、アメリカの経済地図を塗りかえることが予想された。一方で、このことは他の東部の主要都市の危機感を生んだ。各都市が将来の繁栄の道を狭められることを恐れ、アパラチア山脈の西へ向かう川・道路・鉄道建設に大型投資を競い、ホテルに対しても積極的な投資が行われるようになった。事実 1826 年から 29 年にかけて、東部の政治経済の中心都市が毎年大型ホテルを完成させている。

第一が 1826 年開業のボルティモアのシティ・ホテルで、これがエリー運河開通後に建設された最初のホテルである。翌 1828 年には、ボルティモアからオハイオ川沿いの未定の《どこか》を終着点とする鉄道建設工事が始まり、1830 年に 23 km 先のエリコット・ミルズまで開通した。これがアメリカ初の蒸気機関車牽引の鉄道であった。ボルティモアのシティ・ホテルとボルティモア&オハイオ鉄道はボルティモア市の二大公共事業であり、投資家たちも単なる利益追求ではなく、ボルティモアの繁栄が脅かされないことがないよう資金を投ずるという気概を含んでいた。市の衰退を防ぐには、ライバル都市に負けないホテルを持つ必要があるという思いは一致していた。かくして激化する都市間競争が第二次ホテル建設ブームに火をつけたのであった。

ボルティモアのシティ・ホテルはワンブロック全体を占める 6 階建ての大型ホテルで、1826 年に開業した。応接スペースやダイニングルーム、ボールルームはもとより、店舗やランチルーム、理髪店、バーなどに加え、寝室 200 室が設けられた。内部は絨毯や装飾用壁掛けで飾られ、外観はガス灯の照明によって遠くから見分けることができた。このホテルは第二世代に属しているが、設計は 1797 年のリッチモンド・ホテルの設計者ラトロープの弟子の設計によるもので、古い世代の伝統をも受け継いでいた。さるニューヨーカーからの手紙に、ボルティモアのシティ・ホテルに勝る建物は今のニューヨークにはないが、間もなくニューヨークにも比肩するホテルができるだろうと書いている。しかし、ボルティモアに続いたのはニューヨークではなく、首都ワシントンであった。ワシントン D.C. のナショナル・ホテルは、ボルティモアのシティ・ホテルが開業する前に着工されていて、1827 年に完成した。一見してボルティモアのホテルとよく似ている。このことはすでにホテルという建築物がどのようなものであるかというコンセンサスが出来上がっている感じを受ける。4 階建てで 1 ブロック全体を占め、シングルとツウィンの寝室が合計 130 室、居住用のユニットが若干数、宴会場が 12 室のほか、様々な用途に使える数多くの会議室があった。ボルティモアとワシントンに大型ホテルが出来たことは、新聞紙上で大々的に報





トレモント・ホテル

**交通機関発達との連動** ここまで見てきたように、アメリカではホテルはコミュニティの顔たる公的施設とみなされ、経済の在り方、言い換えれば人やモノの移動と連動して発展してきた。最初は大西洋岸沿いの大都市や政治の中心都市に作られ、蒸気船による河川交通の発展によって、北西部の内陸都市にもつくられていく。

1810年にミシシッピ河口のニューオーリンズからセントルイスまで、675マイル（1013 km）の道程を行こうとすれば、船で遡航するにせよ、陸上を馬で行くにせよ1か月かかり、途中のタバーンに泊まりながらの旅であった。それが1830年になると蒸気船による遡航が可能になり、わずか数日の旅に短縮された。しかも船中泊ができることから、途中の宿泊施設も不可欠ではなくなり、沿岸の町は魅力的なホテルをもつかどうか繁栄のカギとなった。第一世代のホテルも都市の繁栄のカギという認識では同じであるが、根本的な違いは、第二世代の場合、ホテルが経営的に成り立つようになったことである。1830年に初の鉄道が生まれ、瞬く間にネットワークが出来上がると、1830年代を通じ、運河、ターンパイク、蒸気船、そして鉄道による内陸交通が急速に整備されていく。

1840年現在における人口40位までの都市のホテルの詳細な調査が行われている。「アメリカ・ホテル史」はその概要を紹介するとともに、40都市の名前と最初にホテルが建設された年を記載した地図を掲載している。当然大西洋岸の都市に集中しているが、内陸部では五大湖周辺のピッツバーグ（1832年）、バッファロー（1836年）、デトロイト（1836年）など、ミシシッピ川沿いではセントルイス（1819年）、河口のニューオーリンズ（1831年）などが挙げられている。第二世代のホテルは、第一世代のホテルとちがって、利用者はエリート層ばかりではなく、誰でも利用できる公的施設であり、大都市であるほど多数の大型ホテルが建設されるようになっていった。

## フィラデルフィア万国博覧会（1876年）まで

40年代と50年代はホテル建設ラッシュの時代であった。ホテルの存在はすでに日常の風景になり、個別のホテルの名を挙げてホテル史を語る時代は終わった。この時期のホテルについて、サンドヴァル＝ストラウスは、ホテルの種類、立地、用途などによる七つの分類を採り入れ、ホテルをシステムとして論じている。豪華ホテル、コマーシャル・ホテル、中級ホテル、マージナル・ホテル（大部屋重ね棚ベッド式）、リゾートホテル、<sup>レイルロード</sup>鉄道ホテル、セツルメント・ホテルの七種である。ざっと見てみよう。

**コマーシャル・ホテル** 迎賓館として扱われた第二世代までの豪華ホテルに次ぐのが、コマーシャル・ホテルである。アメリカ固有の呼称であるが、コマーシャル・ホテルは1820年代に現れる。流通機構が未整備だったこの時期のアメリカでは、企業幹部のビジネスマンだけでなく、セールスマンと呼ばれる営業と販売を行う人たちや、町の商店経営者たちが取引のために頻繁にビジネス目的の旅行をした。1860年には、すでにセールスマンだけで6万人が常時旅行しており、1883年になると、その数は20万人を超えていたというデータがある。「アメリカ・ホテル史」はこの頃のコマーシャル・ホテルの広告キャッチフレーズを紹介しているが、中には、ビジネスマン、セールスマンの求めるものを熟知する支配人の経営であることを強調するあまり、一般客については最後に一行「…一般のお客様も歓迎です」と付け足すだけ、といった事例さえある。

セールスマンの求める基礎的条件とは、「低廉な価格と仕事ができる環境（サンプル・ルームがあること）」であった。1820年代、30年代の高級ホテルが1泊2ドル、週単位で8～10ドルであったのに対し、コマーシャル・ホテルはその半額で宿を提供し、彼らの販売する商品見本（サンプル）を展示するスペースを提供した。コマーシャル・ホテルは常にサンプル・ルームの存在を強調し、「適したサンプル・ルームをお約束します」とか、「当市第一のサンプル・ルームです」などと強調し、事実大都市のコマーシャル・ホテルには10室以上、ときには100室以上もこうしたサンプル展示用の部屋を設けているホテルさえあった。

豪華ホテルやコマーシャル・ホテル以外に、移民が押し寄せた時代のアメリカでは、これらに泊まれない人々のために安ホテルや大部屋に重ねベッドという安宿も東部にはたくさん作られたが、これらの都市型宿泊施設については省略する。

**リゾート・ホテル** これまで挙げてきたのはいずれも都市ホテルであるが、大都市から離れた自然環境に立地するいわゆるリゾート・ホテルも早くから作られていた。立地の環境は海辺だったり、山岳地だったり、田園だったりしたが、初期には都市に付属する施設として大都市住民の富裕層が利用した。奴隷を所有する農園主、巨額の収入ある貿易商など、時間も金も自由になる人たちが利用する別荘型の施設としてつくられたのである。ゆえに彼らの休養と健康保持のために、都市から1日程度で行ける範囲内の温泉地や、空気がきれいいで景観も美しいところが選ばれた。アメリカのホテル第一世代がシティ・タバーンの

後継施設であったとすれば、初期のリゾート・ホテルはヨーロッパの貴族階級が親しんだ温泉地や海浜などの保健・療養と社交目的の施設の後継者であったといえるだろう。たとえば、ボストン近郊のニュートン・スプリングズ、フィラデルフィア近郊のイエロー・スプリングズとブリストル・スプリングズなどが初期のリゾートホテルとして知られる。ヨーロッパ移民の上層階級人士は、18世紀半ば以降に発展したヨーロッパの温泉地を知っており、アメリカでも病気治療や保養目的の滞在に適する場所に高級宿泊施設を求めたのであった。最初のごく小規模の施設だったが、19世紀に入って数年後には大型施設もつくられるようになる。ニューヨーク州のボールストン・スパのサンスーシ・ホテルはその種の最初のもので、1806年に建設され、100室を有する施設であった。他の温泉地もすぐに追従し、1810年代には、コネチカット州のスタフォード温泉、ニューヨーク州のサラトガ温泉、ヴァージニア温泉などに立派なホテルが建設された。さらにその後の数十年間に、温泉地のほかに海岸、山岳地など空気のきれいな環境に多くのホテルが建てられていく。ヨーロッパの文化遺産に匹敵するアメリカの魅力は自然景観であるという認識が生まれ、景勝地にも作られていく。

裕福なアメリカ人たちは自分たちのアイデンティティを自然美に求め、様々な景勝地を観光目的で訪れるようになる。第3代大統領トマス・ジェファソン（在職1801~09）は、早くも1802年にヴァージニアの奇観《自然の橋》**Natural Bridge**を人々が観光できるよう、この地にホテルを建てるよう提案し、ここを「最も神秘的な自然の造形」と呼んでいたという。ヨーロッパのグランド・ツアーの対象が歴史と文化の探訪であったのに対し、歴史的遺産のないアメリカはツアーの対象を自然美の探訪に置き換えたのである。1820年代に東部のエリートが自然美をめぐるツアーを通じてアイデンティティを高めようとし、これが新しい流行を生み出していった。この傾向は、作家や芸術家が商工業化の進む都会の喧騒の外の豊かな自然生活を描写する作品を生み出すことによって、一段と促進されたのであった。最もアメリカらしい景勝の地にはホテルができて当たり前とされる時代になったのである。1824年にリゾートホテルの好立地とされたキャッツキル山岳地にキャッツキル・マウンテン・ハウスが建てられ、1830年にはナイアガラの滝周辺にホテルが林立し、見物客からホテルの客室に入らないと滝見物が難しいというクレームが出るほどだった。同じころ、ニューイングランド地方にも数十軒のリゾートホテルがあり、とくに海岸沿いとニューハンプシャー州のホワイト山地に多かった。

ヨーロッパ同様に、療養目的の滞在はまもなく社交目的に取って代わられる。都市ホテルの滞在日数が平均3泊程度であるのに対し、リゾートホテルではシーズン通しの客が多く、予約も週単位が普通で、月単位のことも稀ではなかった。富裕な家庭は夏中リゾートで過ごし、主人のみウイークデーに働きに戻るというパターンが生まれた。泊り客たちの有り余る自由時間を埋めるために、リゾートホテル側はコンサートや講演会、遊歩道の散策、野外遊び、読書会、室内ゲーム、仮面舞踏会などなど、ありとあらゆるレジャー活動を工夫してリゾート滞在を盛り上げた。当然若い男女の交際も活発で、リゾートホテルは

結婚市場における重要な出会いの場と機会を提供し、年ごろの息子、娘を持つ親たちは当然この場を大切にした。

最初のボールストンでさえ 100 室を超える規模であったが、その後はその数倍の規模に大型化していく。田舎は土地が安いから高層化することなく、周辺の環境に溶け込む工夫がなされ、ネオクラシック様式の、内装も豪華ホテルに劣らず華麗なものに進化していく。「アメリカ・ホテル史」には、リゾートホテルの魅力的な外観と周囲の景観の図がふんだんに掲載されていて、見るだけでアメリカ人富裕層のリゾート滞在が想像されて楽しい。

**鉄道ホテルとセツルメント・ホテル** 最後の二つのホテルはアメリカならではのホテルである。無人の西部へ向かって鉄道が伸びて行くとき、問題になるのが機関車と鉄道のメンテナンスである。機関車は大変手のかかる精妙な存在で、常時の手入れが必要である。燃料を補給しなければ動かないから、燃料保存の倉庫を適当な場所に配置することが不可欠である。万一軌道上で列車が立ち往生すれば万事休す、故障車両を撤去するまで鉄道は全線にわたって使用不能になる。言い換えれば、手の届くところに常時支援の手が用意されていなければならない。そして施設には、常時技術者やマンパワーがシフト制をとって待機していなければならない。周囲に町も村もないとなれば、彼らの寝食や息抜きの場所も必要である。というわけで、鉄道の沿線に沿ってホテルが作られることになる。ヨーロッパと違い、アメリカでは既存の都市に向かって鉄路が延びるのではなく、先に何も無い平原や山岳地に敷設されていくのだから、延びて行く先にロジスティクスを期待することができない。たまたま選ばれた路線の沿線が開発地になっていくだけだからである。ゆえに、民間のボルティモア&オハイオ鉄道が敷かれたときも、官営のノースカロライナ鉄道がスタートしたときも、ともに分岐点にはホテル建設の必要性を認め、既存の集落に鉄道ホテルが設置され、そこが都市へと発展していったのである。前者はメリーランド州カンバーランドであり、後者はヴァージニア州のホイーリングとマーティンスバーグであった。

最後のセツルメント・ホテルは、新しい町が誕生し、あるいは既存の集落が急速な発展を始めるような場合につくられるホテルである。簡単に建てることができ、料金も安く設定される。町が大きく発展すれば、より大規模なホテルに建て替えることを前提とする、いわば使い捨てのようなホテルとして始まった。木造、ピッチを塗った屋根、白塗りの壁面、そして各階の二面、ときには三面にバルコニーをめぐらす。西部劇映画に頻繁に登場するタイプのホテルである。建設材も手に入りやすくコストが安いものを使い、本格的専門家がいなくても作れるよう定型化した建物になっている。西部ではこのようにして町づくりが行われ、発展していったのであった。

**大陸横断鉄道** ここで、西部開拓に向かうアメリカの国土開発のエネルギーを象徴する大陸横断鉄道について触れておこう。東海岸を起点に内陸の開発に向かおうとするとき、鍵となるのが鉄道の敷設であった。鉄道はアパラチア山脈を越えて西へ向かってどんどん作られていき、鉄道誕生 10 年後の 1840 年におけるアメリカの鉄道の総延長は 2300 マイル

(3600 km) に達していた。早くもアサ・ホイットニー (1797~1872) という企業家が大陸横断鉄道の必要性を認識し、1845年に想定ルートに沿って詳細な調査を行い、その結果を1846年に下院議会に提出している。

ホイットニーは1830年に貿易商としてイギリスに渡り、創設間もないリバプール~マンチェスター鉄道に乗って鉄道の将来性を見通した。次いで中国に旅してアメリカの太平洋岸との関係の深まりを想定し、大陸横断鉄道の実現を志したのであった。だが、1846年といえば、まだカリフォルニアがアメリカ領土になる前であり、サンフランシスコの金鉱発見も2年先の話しである。しかも1846年にはアメリカ・メキシコ戦争が勃発しているから、時期尚早と退けられたのもやむを得なかった。大陸横断鉄道はその後紆余曲折したあと、1862年7月、リンカーン大統領が「太平洋鉄道法」に署名して建設が決まり、西はカリフォルニア州サクラメントからセントラル・パシフィック鉄道が、東はネブラスカ州オマハを起点にユニオン・パシフィック鉄道が線路の建設を始め、どちらがどれだけの路線を敷くかを競うかたちでスタートした。1869年5月19日、ユタ準州のプロモントリー・サミットで両鉄道が合体して横断鉄道が完成した。その報はアメリカ中を歓喜で湧き立たせたという。鉄道は人を運び、人が町をつくり、アメリカは西へ向かって大きく発展していく。そして、大陸横断鉄道は奇しくもスエズ運河開通とはほぼ同時期に完成した快挙でもあった。当然ながら、この鉄道の完成は東部から西部への旅行を大きく促進し、その結果ホテルも関連サービスも急速に発展していった。

**南北戦争の影響** 人の移動という面で巨大なインパクトを与えた事件のひとつが南北戦争であった。国中の人々を戦線に動員したから、通常遠くへ行くことのない農民も職人も、奴隷でさえも駆り出され、ヴァージニアへ、ジョージアへ、ルイジアナへ、テネシーへ、名前しか知らなかった国内各地へ徒歩で、馬車で、汽車で、あるいは船で《旅》をした。この体験は国民の視野を広げ、彼らの地平を広げたのであった。平和が訪れてからも、戦争体験者の組織が多数つくられ、一生に一度の戦争体験を平時の旅に置き換え、戦跡を訪れたり記念行事を行ったりしてこの体験を活かしていった。それだけでなく、戦争で千人万人の大量移動を組織した経験者は、道路・鉄道・水運などの輸送路の状況や将来の可能性を知識として共有するようになり、平和到来以後、彼らの知識と能力がフルに活用された。一言でいえば、南北戦争はアメリカ人の旅についての観念を変えたのであった。

このことは、地域ごとの存在でしかなかったホテル産業が、全米規模のホテル・リストが作成されるという形で普遍的な存在となった。ばらばらの都市別のホテル・リストしかなかったのに、1870年代に入ると、いくつもの出版社が突然全米のホテル・リストの刊行を始めたのである。1872年の *Boyd's Hotel directory and Tourists' Guide* であり、1874年の *Satia's Hotel List Guide* であり、1875年の *Gazlay's United states Hotel guide* などである。たとえばボイズのホテル・リストは持ち運び便利なポケットサイズだが、各市町村の名前と人口、鉄道駅、近隣の町からの距離などのあとに、ホテル名・室料金・ミール

プランが記されている。全国版ホテルガイドと鉄道案内を併用すれば、全国どこへでも行ける時代になったのである。

**フィラデルフィア万国博覧会** 旅の促進の意味で南北戦争に匹敵するインパクトを与えたのが、1876年に開催された独立宣言100周年を祝うフィラデルフィア万国博覧会であった。この博覧会はアメリカはじまって以来の大文化イベントであり、建国以来ここまで到達したという姿を、自国民と世界に知らしめる画期的なイベントであった。

1851年にロンドンで初の万国博覧会が開催されてからも、アメリカはこの時まで本格的に参加したことがなかった。1853年にニューヨークで国際博覧会を開催はしたが、これはロンドン万博の小規模な模倣に過ぎず、失敗に終わった。1876年に独立宣言100周年を祝う万国博覧会を開催することを決めたとき、組織委員会は1873年のウィーン万博に視察団を送って詳細を調査した。その結果、それ以前の4つの万博を上回る参観者を集め、過去最大となったウィーン博に比肩する万国博にする決意のもとに準備を進めてきた。会場は当時アメリカ最大の公園フェアモント・パーク（2,470 エーカー）とし、ここに巨大なパヴィリオンを林立させた。この特大イベントには膨大な数の参観客が集まることが予想されたから、何よりも宿泊対策を講じなければならなかった。かくて万博開始日にフィラデルフィアは50室以上のホテルだけで51軒を有したが、そのうち8ホテルは会場のフェアモント・パークに隣接する場所に建てられた。中でもグランド・エクスポジション・ホテルは1325室を有して当時世界最大を誇り、万博主会場から徒歩5分の立地をアピールした。もう一つのトランス・コンチネンタル・ホテルは、万博会場正面入り口前という好立地を謳い、5か月の会期中に72,000名の宿泊客を泊めたと発表した。しかし、これら巨大ホテルも、3,500人の収容力を有するグローブ・ホテルや、5000室を誇るアトラス・ホテルに比べれば、収容力に関する限り影が薄かった。もともと、最後の二ホテルは仮設で、万国博用のパヴィリオンなどの建造物同様、終了後には撤去される運命にあったのだが。

フィラデルフィア博覧会は空前の成功を収めた。初日だけで187,000人が入場し、最盛期には1日25万人が訪れたという。当時のアメリカ合衆国の総人口は5000万人未満であったにもかかわらず、160日の会期中に、実に合計1000万人もの観客が入場した。ニューヨークをはじめとする近隣諸都市のホテル経営者たちも、万博客の誘引に励んだことは言うまでもない。万博入場者数が記録破りであっただけでなく、フィラデルフィア博は、アメリカ人の国内旅行熱を呼び起こす特大のイベントとなり、敢えて比肩しうるものを挙げれば、無理に駆り出された南北戦争しかない、というほどのものであった。

独立宣言100周年記念のフィラデルフィア万博は、かくしてアメリカ人の国内旅行市場創出の一大転機となったのだが、量的な飛躍だけでなく、家族旅行というマーケットを誕生させてことにも意義があった。それまで都市の群衆の囃子といえば、男だけと相場が決まっていたのだが、万国博の写真やイラストには沢山の女・子供連れ家族が登場している。これは万国博の記録によっても裏付けられる。フィラデルフィア万博では504人の迷子が係員のもとに連れてこられ、幸い全員無事に親もとに引き取られたという記録があるとい

う。こうなるとホテルも変わらざるを得ない。80年前にホテルという施設が初登場したとき、女性客も利用したが、子供の姿を見ることはほとんどなかった。フィラデルフィア万博に多数の家族客が登場したことは、アメリカにも新しい時代＝観光の時代が到来したことを告げる最初の合図なのであった。

観光は急速に発展を始める。東西南北どこへでも人が行くようになり、それ以前にはホテルが主として都市に立地し、商業、農業、工業、鉱業など産業関連の需要に対応してきたのに加え、新たに観光立地が大きな要素として登場してきたのである。

### フィラデルフィア万国博（1876年）以降

「アメリカ・ホテル史」によれば、全米のホテル業者総数は、1870年に26,394だったのが1880年には32,453に増え、以下1890年44,076、1900年54,931、1910年には64,504へと増加している。小規模ホテルの急増が中心ではあるが、この間巨大ホテルも増えている。1880年代に鉄筋コンクリートによってビルの高層化が可能になり、ホテルも高層化へ向かう。あらゆる種類の宿泊施設が増える中で、特筆すべきは超豪華ホテルの登場である。アメリカ経済の繁栄は富の偏在を許し、贅沢の限りを尽くしても有り余る富を持つ人たちの数が増え、対応して彼らをターゲットする超デラックス・ホテルが登場する。その最初の例がウォルドルフ・アストリア・ホテルと断言していいであろう。

**ウォルドルフ・アストリア・ホテル** ドイツ系の大富豪アスター家の御曹司ウィリアム・ウォルドルフ・アスターWilliam Waldorf Astorは、1890年に亡父の財産を相続した。1893年に旧邸宅を取り壊し、その跡に当時としては最高層の13階建てのウォルドルフ・ホテルを建てた。次いで1897年に隣接する土地に従兄弟のジョン・ジェイコブ・アスター四世（1864~1912）が16階建てのアストリア・ホテルを建設し、両者がおおよそ30メートルの大理石床の屋根つき通路でつながれ、ウォルドルフ・アストリア・ホテルとして新発足した。この通路はピーコック・アレーと呼ばれるようになり、ニューヨークの上流人士の人気を呼んで、ここを歩くことが一つのファッションといわれるほどであった。1日に二万人もの人々が着飾ってピーコック・アレーを訪れたと伝えられている。創業当初からその豪華さと巨大さで注目を集めたウォルドルフ・アストリアであったが、ニューヨーク市の中心がアップタウンに移るにつれて、ホテルのなじみ客もジョン・ジェイコブ・アスター四世（タイタニックの事故で死亡）が建てたセント・レジーヌ（1904年開業）やザ・プラザ（1907年開業）などへ移り、人気は低下して赤字経営に落ち込んでしまう。さらに、1919年から発効した禁酒法が追い打ちをかけ、1929年についてウォルドルフ・アストリアは取り壊され、その跡地にエンパイア・ステート・ビルディングが建てられた。しかし、取り壊し決定の直後から「ウォルドルフ・アストリアのないニューヨークは無意味だ」と支援の声が上がり、ニューヨークの顔として一時代を風靡したホテルの再建のために、鉄道会社や金融会社など21社が委員会をつくって再建に乗り出した。前の場所より15ブロックほど北のパークアヴェニューとレキシントン・アヴェニューにまたがるワン・ブロック（ペン・

セントラル鉄道の所有地)が用意された。世相は1929年10月24日の「暗黒の木曜日」に始まる大恐慌時代のさ中ではあったが、700万ドルの再建資金を集め、1931年に新しい場所で開催した。第二次世界大戦後の1949年10月、ホテル王といわれたコンラッド・ヒルトンがこのホテルの経営権を取得し、ペン・セントラル鉄道から土地も取得して、今ではヒルトン・チェーンの旗艦ホテルとなっている。

グランドホテル時代の豪華絢爛たるホテルのうち、改修されたものを含め、現代に残る名だたるホテルについては、豪華な写真集や華麗な歴史について紹介する書籍があって、目を奪われる。目についてもものを挙げておくと、河出書房新社の「クラシックホテルズ・オブ・ザ・ワールド全6巻」(フランス、英国、コート・ダジュール、スイス、イタリア、アメリカ東海岸)、および、同社の別シリーズ「グレートホテルズ・オブ・ザ・ワールド全6巻」(クラシック・ホテル、リゾートホテル、アーバンホテル、ホテル・レストラン、ホテルデザイン)は大判の豪華な写真集である。太田土之助「世界の名門ホテル27軒：その歴史」はそれぞれのホテルの歴史を辿ってくれている。大いに参考にさせていただいた。

#### スタットラーによるホテル経営の刷新

われわれがよく知る今日の同型同設備の部屋が多数並ぶ高層の、機能的でリーズナブルな価格のホテルはアメリカで始まった。それまで欧米のホテルは豪華な富裕階層向きのホテルか、快適とはいえない庶民のための小ホテルのどちらかで、中間のホテルが不足していた。室内にトイレがなく、快適な空間とは言えないホテルが多かった。アメリカでは19世紀末期から製造業が大発展するが、流通機構が確立しているヨーロッパ諸国と違って、卸売や仲買などの商業機構の発達が遅れていた。西部には開拓を待つ土地が無制限に広がっており、海外市場の開拓に向かうよりも巨大な国内市場の開拓を競った。それゆえ、製造業もサービス業も、新しいセールスのネットワークを築かねばならなかった。マーケティング技術が発展し、個人や小売業への営業販売はセールマンによって行われていた。セールスマンたちは商品や商品見本を携えて始終旅をしたが、そうしたセールスマンたちをターゲットとする安価で快適なホテルがアメリカではとくに必要とされていた。

これに正面から対応したのがエルスワース・スタットラー Ellsworth Milton Statler(1863-1928)である。スタットラーは1863年、貧しい牧師の家庭に生まれ、オハイオ川沿いの都市ホイーリングで育った。13歳で同市のマクリュア・ホテルのベルボーイの職につく。まもなくボーイ長、夜間のフロント、昼間のフロントへと昇格していき、この間にホテルという施設の機能やビジネスの在り方について学ぶ。ビジネスマンとしての経歴はマクリュア・ホテルのピリアード室とチケット・オフィスの経営を任されて成功したのを皮切りに、ホイーリングでボーリング場、ランチ食堂などの経営へと幅を広げ、バッファローで500席のレストランを開業する。しかし、彼のホテル経営者としての名を高めたのは、二つの博覧会での仮設ホテルの経営であった。まず、1901年開催のバッファロー米州博覧会で2000室の仮設ホテルの経営を受託した。博覧会自体は天候不順に災いされ

たうえ、会場内の音楽堂で時のマッキンレー大統領が暗殺されるという不運な事件が重なって財政的には失敗に終わったが、スタットラーが経営したホテルは黒字で終わらせることができた。次いで1904年のルイジアナ買収100周年を祝うセントルイス世界博では、バッファローを上回る規模の大仮設ホテルを建設から請け負って好評を博し、大きな利益をもたらした。二つの成功が金融界の注目を集め、自前のホテル建設の資金を得る道が開けたのであった。彼はマーケティングや広告の重要性を学び、フレデリック・テーラー（1856～1915）らによって生まれたばかりの科学的管理法や経営学を学んでいった。

**1ドル半でバス付の部屋を** 自前のバッファロー・スタットラー・ホテル（300室）を開業したのは1908年である。安価で清潔で効率的なホテルを目指し、「1ドル半でバス付の部屋を：“A room and a bath for a dollar and a half”をキャッチフレーズに、ホテル経営を簡素化した。すべてを標準化（規格化）し、科学的計数管理による効率的経営手法を持ち込むことによってコストを抑え、安価で質の良いサービスを提供した。建物の構造、客室と客席、調理場などの設計、使用する什器備品類、従業員の組織と仕事の内容などすべてにわたって簡素化し、原価管理その他の経営システムの導入によってホテル経営を一新した。全客室の標準装備はバスルーム、電話、防火扉、カギ穴付きドアの把手、ドアの内側に室内灯スイッチ、バスルーム内の大型ミラー、大型の戸棚（開けると電灯がつく）、冷水専用蛇口、無料の新聞配達 などなど、今日のホテルのスタンダードになっているこれらのサービスは、すべてスタットラーの新案であった。

**近代的ホテル・チェーンの誕生** 彼はそれまでの高級ホテルのように富裕階級をターゲットとせず、一般市民とくに商用・ビジネス旅行者をターゲットとして、低廉な価格で質のよいサービスを提供した。バッファロー・ホテルは大成功し、その後のコマーシャル・ホテルのモデルとなった。また、同質のホテルをクリーブランド（1912）、デトロイト（1915）、セントルイス（1917）、ニューヨーク（1919）に建設し、1923年にはバッファローに新ホテルをつくり（旧ホテルは売却）、そして最後のボストン（1927）まで、7都市にそれぞれ1000室を越える大型ホテルを建設した。1928年に亡くなるまでに合計7,250室を所有し経営したが、スタットラーの死後も未亡人を社長に頂いて隆盛を極め、1929年以降の大恐慌期にも、85%のホテルが倒産する中で、スタットラー・チェーンのみが繁栄を持続した。

スタットラーはT型フォードを生産したヘンリー・フォードの規格化と大量生産による質の高い商品の供給というコンセプトを受け継ぎ、そして、テーラーの経営学とマネジメントの思想をホテル経営に持ち込み、チェーン化を図って成功したのだが、その範囲はアメリカ国内のみの展開であった。第二次大戦後の1954年、スタットラー・チェーンはコンラッド・ヒルトンに全チェーンホテルに売却して使命を終えた。

## 世界に進出するアメリカのホテル

1920年代にホテル建築ブームが起こって多数のホテルが誕生したが、1929年に始まる大恐慌でホテルの業績は急速に悪化した。これで立ち行かなくなった中小のホテルを買収して巨大ホテル・チェーンを構築していったのがシェラトン・チェーンを生んだアーネスト・ヘンダーソン Ernest Henderson (1897-1967) と、ヒルトン・チェーンを生んだコンラッド・ヒルトン Conrad Hilton (1887-1979)である。スタットラーのように自らホテルを建設するのではなく、両者とも金融業者として、不動産業者として、買収によるチェーン拡大で実績を上げていった。

**シェラトン・チェーン** アーネスト・ヘンダーソンは、ハーバード大学のクラスメイトのロバート・ムーアと共同で、第一次世界大戦従軍兵のボーナスを利用して不動産業を始め、経営困難な中小ホテルを買い、1939年にはボストンに3軒のホテルを所有していた。その一つがシェラトン・ホテルであった。このホテルの屋上には《シェラトン・ホテル》という巨大なネオンサインの看板がかかっており、これを撤去すると莫大な金がかかることからそのままにし、名前と書体が気に入ったこともあって、自分たちが作ろうとしているホテル・チェーンの名称に採用した。その後東海岸一帯に急速にチェーンを拡大し、高級路線をとって、1945年にはホテル企業として初めてニューヨーク株式市場に上場した。1949年にはカナダの二つのホテル・チェーンを買収して国際展開を始め、1961年2月にテルアビブに北米以外に初のチェーンホテルを開業すると、急速に国際ネットワークを広げていった。ヘンダーソンが1967年に亡くなった時、154軒ものホテルを所有していた。彼は不動産を見る目は確かで、業績の悪いホテルを買収しては経営を立て直していったが、スタットラーや後述のヒルトンのようなホテル経営の改革者ではなかった。彼の死後、1968年に多国籍企業ITTがチェーンを買収し、ITTシェラトンとなった。1998年にはウェスティンとともにスターウッドに買収され、スターウッド・ホテルズ&リゾーツ所属のブランドとなった。

**ヒルトン・チェーン** コンラッド・ヒルトンは、第一次世界大戦に従軍してヨーロッパで過ごした後、1919年石油ブームに沸くテキサス州にやって来た。銀行を買収して銀行家になろうと志すが、手ごろな買い物がみつからず、たまたま40室のホテル・モウブレを買収したことがきっかけでホテル経営者を目指すことになった。1925年にはダラス・ヒルトン、1927年にアビリーン・ヒルトン、1928年にワコ・ヒルトン、1930年にはエルパソ・ヒルトンと矢継ぎ早にテキサス州内にチェーンホテルを展開する。ところが、大恐慌期に彼自身破産状態に陥ってほとんどのホテルを失って苦境に立つが、一軒だけのホテル支配人として生き残り、まもなく残りの8軒のチェーンホテルの支配権を取り戻し、第二次世界大戦終結前後に有名ホテルを次々に買収していく。1945年に3000室を有するシカゴのスターブンス・ホテル The Stevens (後のコンラッド・ヒルトン) とパーマーハウス・ホテル Palmer House を買収し、1946年にヒルトン・ホテル・コーポレーションを設立して株式を上場し、1949年にはウォルドルフ・アストリア・ホテルを買収してホテル経営者としての名を高め

た。この年ヒルトンは、海外ホテル第 1 号としてプエルトリコのサンファンにカリブ・ヒルトンを開業したが、これは初の経営委託によるホテル展開であった。チェーン展開を早めるには、土地の取得や建設コストの負担を免れる方法として、経営委託料を受け取る方式、ホテルをリースして経営する方式、フランチャイズ方式などがある。この時ヒルトンはプエルトリコ開発公社との契約で、土地と建設費を公社が負担し、ヒルトンの名前で経営し、委託料を収受している。プエルトリコ側では、ヒルトンに有利過ぎる契約だと担当者が非難されたが、カリブ・ヒルトンができたおかげでアメリカ人観光客が続々やってきて、このプロジェクトは双方に大いなるプラスをもたらした。

第二次世界大戦後、アメリカは世界最大の観光客贈り出し市場となり、シェラトン、ヒルトン両チェーンともに急速に世界展開を拡大する。また、航空機の時代が到来すると、優位に立ったアメリカが、世界最大の国際線航空会社であったパン・アメリカン航空がホテル業への進出の先鞭をつけ、以後次々と航空会社のホテル業へと進出が続くのだが、その展開は現代史として稿を改めることとする。